

未来人としての子供へ —手塚治虫 仕事に込めた願い—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

医学生でありながら手塚治虫 (1928-1989) が漫画家になったのは生活の安定より好きな仕事を優先したからだ。睡眠は3日間で3時間のときもある猛烈な仕事ぶりて命を擦り減らした。

天性のクリエイターとして漫画からアニメーションへと想像力の翼を広げていった。続々と湧いてくるアイデアを形にするためにアシスタントを雇って日本初のプロダクションを設立し、組織的な分業化によって漫画とアニメ制作をビジネスとして確立する。生涯に描いた漫画は15万ページ、アニメは60タイトルに及んだ。

膨大な作品を通じて手塚は何を伝えようとしたのか。命を削るほどの並々ならぬ熱意が超人的な仕事を支えていた。

医学生で漫画家デビュー

手塚は現在の大阪府豊中市で本名・治として生まれた。父は住友金属の会社員、母は陸軍中将の娘で共に漫画好きだったという。

一家は手塚が5歳のとき宝塚市に転居し、よく宝塚少女歌劇団の公演に連れていかれた。家には映写機があり、チャップリンの喜劇やディズニーのアニメ映画を観ることができた。

池田師範附属小学校に入学すると、漫画を描きはじめてクラスの人気者になる。休日は昆虫採集に熱中し、甲虫のオサムシにちなんで治虫というペンネームを使いはじめた。

1941年、軍国主義教育が強まるなかで大阪府立北野中学校に入学。小学生時代と一変し、漫画を描いていると学校教員の教官に殴られた。3年後、身体の弱かった手塚は強制修練所に入所させられ、学校へ行く代わりに軍需工場に駆り出される。

戦時中の修業年限短縮によって北野中学を4年で卒業し、勤労奉仕をしているときに大阪大空襲に遭遇した。頭上で焼夷弾が炸裂し、かろうじて助かった手塚は家に閉じこもってひたすら漫画を描きつづけた。

終戦間際の1945年、大阪帝国大学医学専門部に進学し、学業の傍ら才能を見込まれて地方新聞に4コマ漫画を連載する。1947年に酒井七馬との共作で念願の長編ストーリー漫画『新寶島』を出版すると当時としては異例のベストセラーになった。漫画家になることを決心した手塚は全国誌で『ジャングル大帝』や『鉄腕アトム』の前身となる『アトム大使』の連載を開始する。必死の努力で大学も卒業し、1年間インターンを務めて医師国家試験に合格した。



手塚治虫

テレビアニメに挑戦

1952年に上京し、翌年から豊島区のトキワ荘に入居した。手塚に続いて藤子不二雄、石森章太郎、赤塚不二夫らが入居し、木造2階建てのトキワ荘は漫画家の聖地として有名になる。

人気漫画家となった手塚はリアルな筆致による劇画の台頭に脅かされながらも『鉄腕アトム』や『リボンの騎士』のヒットで確固たる地位を築いていく。漫画で稼いだ資金は子供の頃から憧れていたアニメ制作に注ぎ込むことにした。

1961年、東映動画などからスカウトしたスタッフ6人で手塚治虫プロダクション動画部を設立。処女作の40分カラーアニメ『ある街角の物語』はブルーリボン賞など数々の賞を獲得する。翌年から虫プロダクションとして株式会社化し、手塚が社長に就任した。

テレビ局と交渉して1963年、日本初の毎週30分枠アニメ番組『鉄腕アトム』がスタートする。少人数のスタッフで制作するために試行錯誤してリミテッド・アニメーションという新たな手法を導入した。セル画を大幅に減らし、静止画を効果的に使うことで短時間・低価格によるアニメ制作を可能にした。

テレビ局から格安の制作費で請け負う代わりにアニメの登場キャラクターの使用料を取得できるようにした。いわゆるキャラクター・ビジネスだ。テレビでキャラクターが全国的に知れ渡れば関連グッズも売れる。手塚の狙いどおり鉄腕アトムの玩具やシールは飛ぶように売れはじめた。

1965年には日本初のカラーテレビアニメ番組『ジャングル大帝』の放送も開始される。同年、虫プロの著作権部門を独立させて虫プロ商事を立ち上げ、版權収入で莫大な利益を上げるようになった。最盛期には社員の数も500人以上に膨れ上がる。アニメ制作部門では杉井ギサブロー、りんたろう、富野由悠季ら錚々たる監督を輩出した。

ところが1971年、手塚が虫プロ社長を退くと経営状態が一気に悪化し、1973年に虫プロ商事と虫プロが相次いで倒産。手塚は個人で巨額の債務保証を行っていたことから債権者に追われる身となった。漫画家としても人気低迷し、みずから冬の時代だったと回想している。

かつてない窮地に陥った手塚はそれでも創作への意欲を失わなかった。背水の陣で臨んだ新連載『ブラック・ジャック』や『三つ目がとおる』の大ヒットでどん底からの復活を果たす。

鉄腕アトムのように

漫画でもアニメでも手塚の作品の根底には常にひとつのテーマが流れていた。「終始一貫して僕が自分の漫画の中で描こうとしてきたのは、次の大きな主張です。命を大事にしよう！」と。少年時代の悲惨な戦争体験を通じて命の尊さを思い知らされた手塚は「ただひとつ、これだけは断じて殺されても翻せない主義がある。それは戦争はご免だということだ」と赤裸々に語っている。

命を大切にすることは基本的人権を擁護することにつながる。手塚は漫画を描く際に戦争や災害の犠牲者をからかったり、特定の職業を見下したり、大衆を馬鹿にすることをきびしく戒めた。

自分の使命は二度と戦争を起こさず、命の尊厳を守り、生きる喜びを子供たちに伝えることだと信じていた。「子供は、その時点時点で常に現代人であり、また、未来人でもある」として子供たちが鉄腕アトムのように平和な未来をつくっていくことを真底から願っていた。

晩年は自己のルーツをたどった『陽だまりの樹』やナチス・ドイツのアドルフ・ヒトラーに焦点をあてた『アドルフに告ぐ』などの青年漫画で新境地を切り拓き、名実ともに漫画の神様として頂点を極めた。しかし1988年11月に中国の上海市で開かれたアニメ・フェスティバルで倒れ、帰国後ただちに入院を余儀なくされた。昼夜を問わないハードワークで疲弊した身体はいつのまにか胃癌に蝕まれていた。

病院では妻や医者たちが止めるのを振り切ってベッドの上で連載中の仕事をつづけた。翌年1月になるとたびたび昏睡状態に陥り、意識が戻ると「鉛筆をくれ」と言って起き上がろうとした。

100歳まで生きて漫画を描きたいと話していた手塚の心中は察するに余りある。2月9日の昼前、生き急ぐように60歳でこの世を去った。

最後の言葉は「頼むから仕事をさせてくれ」と伝えられている。